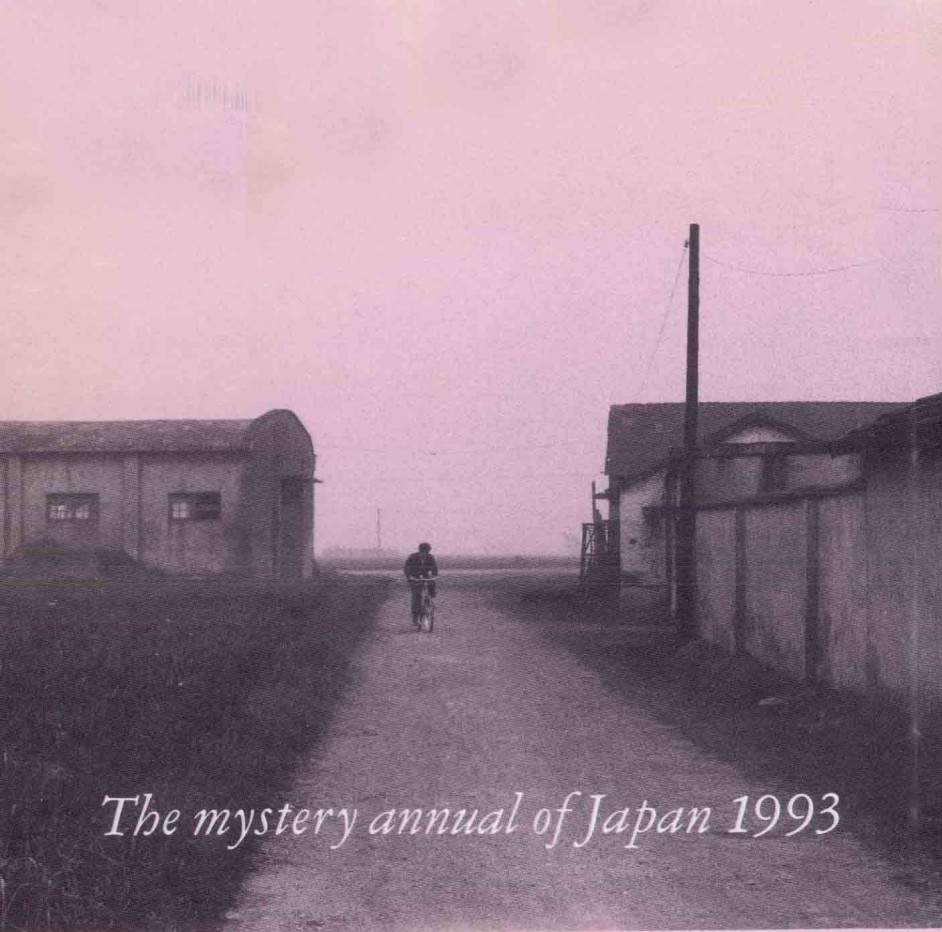


推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1993



1993年版 日本推理作家協会編



The mystery annual of Japan 1993

1993=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編 講談社



1993年版 推理小説年鑑
推理小説代表作選集

1993年 6 月10日 第1刷発行

編 者 日本推理作家協会
発行者 野 間 佐 和 子
発行所 株式会社 講談社

東 京 都 文 京 区 音 羽 2-12-21
郵便番号 112-01

電話 編集部 03(5395)3505

販売部 03(5395)3622

製作部 03(5395)3615

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

© 日本推理作家協会 1993 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-114535-5 (文2)

1993年版 推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序		生島治郎	5
熱い闇		山崎洋子	9
密室の職権		佐野 洋	41
他人の背広		乃南アサ	75
ジローのいた日々		本岡 類	87
優しい水		若竹七海	103
ノックを待ちながら		井上夢人	123
陰の歌麿		高橋克彦	143
八年目の毒		日下圭介	167
ステーション・パーラー		高村 薫	191

家路	……	連城三紀彦	225
姥捨ての街	……	小池真理子	251
人喰い鮫	……	伴野 朗	281
いつもの儀式	……	御坂真之	303
重ねて二つ	……	法月綸太郎	325
帰らざる旅	……	青山 暝	341
黒髪の焦点	……	夏樹静子	381
推理小説・一九九二	……	二上洋一	416
S F 1992年	……	風見 潤	420
受賞リスト	……		425

装帧 細谷 巖
写真 稲越 功一

序

日本推理作家協会理事長

生島治郎

本書は一九九三年版の日本推理作家協会編纂による『推理小説代表作選集』であります。

つまりは昨年度中に発表されたミステリの短篇の中から十六篇が選ばれているということになります。

しかし、年間に発表されるミステリの短篇はあまりにも多数になるので、その中から十六篇を選び出すのは大変な作業なのです。

ここに、その編纂にかかわって下さった郷原宏、原田裕、山前譲、林邦夫、多田兼成、新保博久、中村利夫の七氏に厚く御礼申し上げる次第です。

推理小説はかつては探偵小説と呼ばれておりました。名探偵が主人公になって事件を解決する小説というイメージがあつたからでしょうが、今やそういうイメージではなく、謎と意外性が濃厚にあり、それらを推理小説的手法で描いてゆく小説すべてを推理小説と呼び、ミステリと呼ぶようになりました。

つまりはそれだけ視野が広くなり、ジャンルの幅も広まったということが出来るでしょう。同時にいろんな形の推理小説が生れる可能性も高まったと云えると思います。

現に、毎年、そういう可能性に挑戦する新人が生れ、新しいタイプのミステリが生れつ

つあります。

ミステリは多種多様であると同時に、それに伴ってミステリ作家の層も年々厚くなってきているのです。

そして、ミステリのジャンルが他と際立ってちがうところは、ミステリ作家はすべてプロであらねばならぬということです。自分の楽しみを読者に適確に伝え得るプロでなければ、ミステリ作家とは認められないのです。

ここに紹介する十六篇も、そのプロ中のプロが自信を持って、読者の前に披露する短篇ばかりです。

では、どうぞ、そのプロフェッショナルが描き出す世界を存分にお楽しみ下さい。

平成五年四月

1993年版推理小說年鑑
推理小說代表作選集

熱い闇

山崎洋子

なんですか、これは。

心理テスト？ なんのためにそんなものが必要なのでしょうか。わたくしがなぜあんなことをしたか、あなたがたは要するにそれをお知りになりたいんですよ。

でしたらこんなテストなんか必要ありません。わたくしの心理は、誰よりもこのわたくしが知っておりますもの。なんでもお話ししたいでしょう。遠慮なさることなんかありませんよ。だつてわたくし、話したいんですよ。直志のこと、わたくしのこと、そしてわたくしと直志の大切な日々のことを……。

深層心理？ わたくしの？ いえいえ、もちろんその言葉の意味はわかりますとも。こう見えても一応、高校の教師ですから。

つまりあれでしょ。あなたがたは、わたくしの生まれ育ちからお聞きになりたいのね。それが、わたくしのしたことと深い関わりがあると、そう信じてらっしゃるのね。

では最初にこれだけはお願ひしておきましょう。わたくし

のしたことを、なにかのパターンに当てはめようなんて思わないでください。あなたがたはどうしてそういうことをしたがるのかしら。テストをして、その結果で人の行動をいくつかのグループに分類するなんて、そんなつまらないこと……。

教師として言わせていただけるなら、それこそが教育の問題点ですわ。そんなことをしているから、学校も生徒も、それに教師も、どんな顔になつていくのです。ああわかつてますわ。そんな顔をなさらないで。いまのわたくしは、確かに教師の肩書を剝奪されてます。犯罪者……そうおっしゃりたいんですよ？ だからおとなしくテストでもなんでも受け、聞くことに答えればいいのだと……。

そうはまいりません。あなた方は確かにわたくしの肉体を拘束しています。でも、わたくしの精神までは自由にできません。ですからもう一度、はっきりと申し上げましょう。わたくしがどんな親から生まれ、どんな育ち方をしてきたかなんて、今回のことには全く関係ありません。わたくしがいて、直志がいた……原因をあげるとすれば、それだけのことですわ。

困った顔をなさつてますわね。わかりました。あなた方が仕事をしたという証明になるように、なにかお答えしま

しよう。

そうね……強いていえば、わたくしが教師であつたといふことが、なにかしら関わりあるかもしれないわね。どういふことかと申しますと、教師というのは、人間を創り上げるのが仕事です。そしてわたくしはそれを、自分の天職だと信じております。

間違えないでいただきたいのですが、つくる、というのは、“作る”でも“造る”でもないんですよ。“創る”……そう、人間を創造するのです。

あなたがたは、わたくしのことをいま傲慢な女だと思われたでしょう？ 人間を創造するなんて、思ひ上がりもいゝところだと。いいえ、お互いにとりつくるうのはやめましょう。否定なさつても無駄ですわ。あなたがたの眼が、声高にそう語つてますもの。

まあ、どうお思ひになつてもそれはそれで結構です。話をお聞きになりたいのなら、しばらく我慢していただきます。不愉快だろうが、気持ち悪からうが……。

人間を創造するといふわたくしより、他人の心の奥底を見抜けるつもりになつてゐるあなたがたこそ、ほんとに傲慢なのですから。



あなたがた、直志の写真をご覧になつたんでしょ。全部見て下さつたかしら、小学生の頃から最後まで……ああ、見て下さつたのね。それなら話が早いわ。ではまず、高校二年の時の写真を思い出していただきますでしょうか。始業式のスナップです。男女数人のグループに混じつて、迷惑스러운顔で写つてゐるあの写真です。

痩せ細つて、髪なんかぼさぼさで汚くて、制服のボタンはわざとだらしなく外して……そう、ニキビが顔にいっぱい出てました。その年、わたくしはあの高校へ赴任してきました。最初は単なる美術教師で受け持ちクラスはなかったのです。ところが、二年一組を受け持っていた教師が病気で倒れ、きゆうきよ、六月から、わたくしがそのクラスを受け持つことになりました。

そう……わたくしはその時から、直志の担任になつたのです。そして、あの子が一番後ろの席で、ぼんやりと窓に顔を向けてゐるのを見た瞬間、ああこの教室でわたくしを待つていたのはこの子なのだ、と知つたのです。

他の生徒だつて待つていただろう、ですつて？ 冗談でしょう。それこそ傲慢な発想ですわ。

わたくしが担任になつた二年一組は、生徒数が三十二

人。この生徒たちすべてと深い接触を持つなどということは、わたくしキリストでも聖徳太子でもございませんから、できるわけございません。あの時、わたくしの教師としてのキャリアは、すでに七年になっておりました。でもその七年間、一度として、そのように思ひ上がった意識は持ちませんでした。

わたくしをほんとうに必要とする生徒……そういう子を、一人か、せいぜい二人見つけて、心から向かい合う……できるのはそれだけです。その方法も、まず教師であるわたくしが先に心を開く、そして相手にも徐々に心を開いてもらう、そういう素朴なものです。

それなのにあなたがたは、自分たちは高みに立つたまま、わたくしの心を無遠慮に押し開こうとしてらっしゃる……ほんとを言えば、とんでもない話ですわ。いいえ、心配なさなくても喋ります。お聞きになりたいことはなんでも喋りますわ。でも一応、そのことだけは申し上げておきましょう。

さて、直志の話に戻りましょう。ひとことで言うと、彼は落ちこぼれました。あの名だたる進学校へ入れたくらいですから、もちろん頭は悪くなかったのです。高校入学までは、いわゆる優等生だったといえるかもしれません。

でも高校生になったとたん、彼の中でなにかが崩れまし

た。そのお話はまた後で詳しくいたしましょう。ともかく、担任の教師と生徒としてわたくしたちが出会った時、彼は不良と呼ばれ、教師たちにも生徒たちにも嫌われていた存在でした。

でも授業を休むということは、不思議になかったのです。遅刻をすることもほとんどありませんでした。それどころか、誰よりも早い時間に登校し、教室の一番後ろ、一番端の席で、じつと窓の外を眺めているのです。

でも直志は、ただそこにいるだけでした。なにも見えないし、なにも聞いてはいないのです。まるで薄汚い木彫りかなにかのように、じつと座っているだけ。気がむくと、カバンの中から食べ物……そうですね、市販の弁当とか、パンとか、そんなものを、無表情で口に押し込んでいました。

一年の時の担任から聞いたところによると、彼は昨年の二学期が始まった頃からこういう状態だったようです。その担任も、なんとかしなければと思ったようで、最初のうちは親や本人と、何度か話し合いの場を持ったようです。

この話し合いというのが、わたくしに言わせればまったく無意味なものなのですが……。だってその担任から内容を聞いた限りでは、まったく教育のマニユアルどおりなん

ですもの。

つまり、両親の仲が悪いのではないか、同級生からのいじめがあつたのではないか、不良グループに引き入れられたのではないか、と、まあ、そのどれかに原因があるに違いないと決めつけて、執拗にそれを追及しただけなのですから。

ともかく、担任教師の的外れな努力は実を結ばず、彼の態度はますます悪くなつていったようです。その頃はまだ、ぼんやり窓の外を見ながらも、無意識のうちに教師の話を聞いていたのでしょう。彼は留年せずに、ちゃんと二年に進級しました。それから、本格的な授業無視、周囲の人間無視が始まつたのです。

彼に構うものはひとりもいませんでした。教師も生徒も彼を気味悪がつていたといえます。一度、男子生徒数人が彼を校舎の裏に呼び出し、おまえ、もつとしゃつきりしろ、などと言つて責めたことがあつたらしいのです。でもその時、直志は終始無言。苛立つた相手が殴りかかつてきても、されるがままになつていたといえます。血みどろになつて……。

殴つた生徒は悪い子じゃなかつたから、きつと直志のことを立ち直らせようと思つてやつたんでしょね。直志が殴り返し、最後には男同士抱き合つて涙を流し、友情を誓

いあうという、マンガみたいな青春ドラマを勝手に想定して……。

でも直志はそんなことにつてこなかつた。以来、同じクラスの子たちも、直志と口をきこうとはしなくなつたようです。クラブ活動なんかはもちろん、なにひとつしてないし、趣味もなし。朝起きて学校へ行つて、教室でぼんやりと一日を過ごし、家に帰つてまたぼんやりとベッドに寝転がつている……そういう生活だったのです。

担任としてどう接したか？ あなた、そんな大切なこと、いわば話の核心になるようなことを、いきなりひとことと喋らせようとしなくてくださいな。よくそれで人の深層心理がどうのなんてことを言えますわね。

コーヒーをいただけませんか？ ハワイの『コナ』を一杯……インスタント？ それしかないのですか？ ではないりません。かわりにお水を一杯——心までは無理でも、喉を潤す程度の役にはたつでしょう。



わたくしが、担任として直志にどう接したか——あなたがたは早くそれをお知りになりたいんでしたわね。わかつています。でも物事には順序というものがありますからね。どう接したか、ではなく、どう思つたかというところ

から始めましょう。

まあ確かに、一見したところ、直志は薄汚い生徒でした。愛嬌ももちろんありません。目付きは鋭いの、視線はいつも焦点が合っていない……それも普通の人から見れば不気味だったでしょう。

でもご存知のとおり、わたくしは美術の教師です。一般の人間とは別のものを見ることが出来ます。

直志の汚さというのは、言ってみれば擬態です。体に土くれをまとい、自分をまるでゴミのかたまりのように見せかけている蜘蛛^{クモ}がいると聞きましたが、彼の場合もそれなのです。ゴミに見せかけるのはなんのためかって？ あら、擬態という言葉を知らないのですか？ 身を隠すためですよ。敵から逃れるためですわ。

直志の敵は、両親であり、教師たちであり、周囲の生徒たちでした。いえ、この世間一般と言ってしまうても過言ではないでしょう。直志の持つ優れた感性、才能に、もし彼らが気づいたら、いったいどうなるとお思い？

よってたかって、彼を「更生」させ、才能を「磨いて」くれようとするでしょう。

直志はそれを避けるため、ゴミを装わざるをえなかったのです。

彼はとても上手に擬態していたといえます。でももちろ

ん、わたくしの眼をごまかすことはできません。無視した振りをしながら、わたくしは彼を観察しました。で、まづ気がついたのが、彼の顔です。

もう一度、最初の写真を思い出していただけます？ いかげすか。後の彼とは似ても似つかないでしょ。でもわたくしには、その頃から見えていました。ニキビと厭世的な表情とろくに櫛も入れてない髪——その裏に隠された、完璧なまでに端整な顔立ちが——。

さらに感動的だったのは、彼のスタイルです。背はそう高いほうでもなかった……そう、百六十七センチくらいだったでしょう。痩せてはいましたが、肩幅のある逆三角形の上半身といい、腰高でお尻の引き締まった下半身といい、それはもう、わたくしが彫刻家だったら、彼をモデルにして、すぐさま新ダヴィデ像を彫り上げたことでしょう。

でもその新鮮な肉体を、彼はいつもよれよれの学生服に包んでいました。ありがたいことにそのおかげで、誰もわたくしの宝物に気がつかなかったのです。

フォルムとしての彼が完璧だということを確かめてから、わたくしはようやく、彼の家へ家庭訪問にまいりました。夏休みも終わり、二学期が始まってからのことです。

これは担任としての義務ではありますが、わたくしとし